

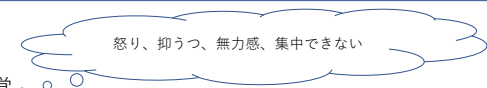
## 子どもたちの側において 安全基地として機能するには

杉原太郎（発表者）  
岡崎彩・出先早紀（資料作成・準備）

## 子どもたちの側にいる大人は？

### ・大人の状況

疲労感  
振り回される感覚。○○  
目の前のことにいっぱいいっぱい



## アタッチメント理論から子どもの安全基地を考える

- ・私たちは生まれた時からすでに人にくっついて安心するようになっている
- ・心的苦痛、怖れを感じると私たちは安心できる人・対象をもとめる（アタッチメントシステムの活性化）
- ・そして、その求めた人にシグナルに気づいてもらい、正しくそのシグナルを解釈し、素早く適切に反応（感性）することで安心感を得て
- ・またいろいろなことに興味をもって動きだせる（探索行動）




- ・今、子ども（大人）に必要なのは自分が安心できる人に側においても  
らえること、そして怖れと心的苦痛へ素早く適切に反応してもらう  
ことである

## アタッチメントから見る支援者の役割

- ・支援者（大人）の役割は、表に現れた問題やシグナルの背後に  
恐れや苦痛を読み取ること、
- ・そして、問題への物理的対処とともに中核にあるその恐れに安心感を届けることである

### ・物理的対処については？

→  消毒やマスク、リモートの対応、行事の調整などなど

大人たち（支援者）もそれぞれの方法で本当によく頑張っています

→ 私たちも自分で自分をいたわり、ねぎらいましょ

## 大人と子どもの安全基地をどう作るか

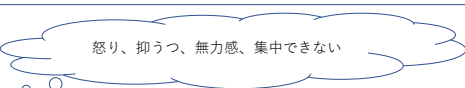
### ・大人の状況

疲労感

振り回される感覚。

目の前のことにいっぱい

怒り、抑うつ、無力感、集中できない



安全基地として機能しにくい状態

大人自身が自分のところを整えることの必要性  
(例：5分程度でいいので、周囲の人と自分の今の感覚について話す時間を持つ/  
深く深呼吸して「サポートする大人として」子どもたちの前に立つ)

## アタッチメントから見る支援者の役割

- ・支援者の役割は、**表に現れた問題やシグナルの背後に恐れや苦痛を読み取る**こと、
- ・そして、問題への物理的対処とともに**中核にあるその恐れに安心感を届ける**ことである

・子どもたち（大人たち）の恐れや苦痛の読み取りについては？

・子どもたちの恐れに安心感を届けることは？

→**周りのかかわりのある子どもたちの顔を思い浮かべてみましょう**

## 安心感のケアを届ける（工藤,2020）

- ・「より微細なシグナル」に気づく
- ・「見ること」「耳を傾けること」「顔を向けること」
- ・「ほほ笑みかけること」「側にいること」など



「見る」…じっと見ること、顔はこちらを向いていないが話し声や足音を聞いていそうなこと、何かを言うわけではないが顔を向けていること、とりとめのない話をする、など

「側にいる」…子どもが何もしないけど側に来ること、グループの話に入るわけではないが何となく目に見える範囲にいること

→シグナルに敏感になるとともにおざなりに扱わないことが重要

## ケアにおける敏感性の視点（エイズワース改）

・私たちのケアにおける敏感性を高めるために…

- ・子どもの視点になってみる  
→「自分が子どもだったら…?」「どう思っているだろう?」
- ・自身の気持ちが強くなって知覚が歪められていないかどうか  
→その子どもへの声かけに自身の気持ちが強く表れていない?
- ・子どもが何かを求めているときにそれに応えられている?
- ・もし、その求めが適切ではないときには子どもにとって受け入れやすい代替案を提供できている?
- ・養育者と子どもがお互いに（ほどよく）満足しているかどうか

引用・参考文献

- 遠藤利彦『乳幼児期のこころーアタッチメント理論の視座から考えるー』講義資料
- 北川恵・工藤晋平編集『アタッチメントに基づく評価と支援』誠信書房、2017
- 工藤晋平『支援のための臨床的アタッチメント論ー「安心感のケア」に向けてー』ミネルヴァ書房、2020